

# 信濃美術館の実施設計にかかる 意見交換会（障がいのある方等）の概要

日 時：平成 30 年 7 月 10 日（火）午後 1 時 30 分から 3 時 45 分

場 所：長野市障害者福祉センター 体育室（大会議室）

出席者：(株)プランツアソシエイツ 副所長 吉満聡氏 ※宮崎氏は体調不良のため欠席  
信濃美術館 松本透館長

長野県 日向修一信濃美術館整備室長、塩入一臣施設課企画幹

参加者：27 名

概 要

[意見交換テーマ]

○施設全般

[主な意見等]

## 【全体】

○信濃美術館の整備にあたり、障がい者の意見を聴きながら設計等を進めていることに敬意を表する。

## 【設計関連】

○美術館に人を呼ぶためには善光寺からの動線が重要。交差点の横断に階段とエレベーター併設の陸橋を希望する。

○新美術館は来館者の寄り付きが何か所もあるが、視覚的にはもっと善光寺側からアピールできたほうがよい。

○今後、障がい者に関わらず、高齢者も含めてバスの需要が増える。バス停は、国土交通省推奨のバリアフリータイプを採用してほしい。

○美術館のある城山公園は、長野市の中でも積雪が多い場所であり、凍結が心配。駐車場から美術館までの間、車いすが通れる幅程度はロードヒーティングを入れてほしい。車いすは積雪 3 cm でも操作しにくくて危険である。

○駐車場から美術館までの路面は、車いすのタイヤになるべく汚れが付かないような仕上げにしてほしい。また、歩行者にもなるべく滑らない材料を使ってほしい。

○特別支援学校など団体で行動する際に、エレベーターと階段が離れていると一緒に活動しているのにクラスで活動ができなかったと感想を言う子どもがいる。その点、新美術館は階段とエレベーターが近くにあってよい。

- 公共施設のエレベーターはとても狭い。最近は車いすも高機能になり大型になっている。大きなエレベーターを設置してほしい。
- 重い障がいのある子どもがいる家庭でも家族で出かけたいし、美術館も楽しみたい。子どもは車いすに乗ったままのため、車いすから降りして寝た状態で美術を楽しむ部屋が常設であるとよい。
- 障がい者トイレには、大人の肢体不自由者や重複障がい者のための大人用ベットの設置してほしい。
- 聴覚障がい者が、緊急時にトイレに入っている場合、緊急放送が流れていることが分からない。緊急放送が流れた時に、今、緊急放送が流れていることをフラッシュライトのような光で知らせてほしい。
- 新しい建物をつくる際に、聴覚障がい者が呼ばれて避難訓練を行ったことがある。訓練の際にトイレに入っていたが、白い壁にフラッシュライトが白っぽい色であったためライトが光ったことに気づけなかった。危険を知らせるフラッシュライトの色に配慮してほしい。ライトの設置場所は上よりも横のほうが気づきやすい。
- 美術館なので、障がい者トイレをたくさん作る必要はないのではないか。エレベーターの中でトイレの場所の案内をしっかり行い、エレベーターを降りたそばにトイレがあればよいのではないか。配置上の工夫で対応できるのではないか。
- 特別支援学校などが団体に鑑賞する際、車いすの子どもが10人位でトイレに行くことがありトイレが足りない。また、広いところで落ち着ける子どももいるが、こじんまりとしたところでないで落ち着けない子どももいる。休める部屋があるとよいし、そこでトイレも一緒にできるとよい。
- 音声ガイド等をつくる際は、視覚障がい者の意見が反映されたものにしてほしい。
- 知的障がい者にも分かるような展示室やトイレなどのサインがあるとよい。また、そのサインを館内マップに入れるとよい。
- 聴覚障がい者への対応として、磁気ループの設置を検討してほしい。
- 聴覚障がい者が講演会などで困るのが、スライドを見るために会場を暗くする際に手話通訳者の立つ場所が暗くて見えないこと。手話通訳者にスポットライトが当たる照明の配置にしてほしい。
- 緊急時の情報がマルチファンクションウォールに表示されるのはとてもよい。緊急放送が流れた時に、マルチファンクションウォールにフラッシュランプが点灯する工夫があると聴覚障がい者も情報を見に行くことができる。
- 聞こえない人とのコミュニケーションツールについて、今は様々なツールがあり、

特にスマートフォンを使う人が増えている。スマートフォンを使って聞こえない人が文字情報を得ることができるが、インターネットが繋がらないとその機能が使えない。Wi-Fiなどのインターネット環境の整備をお願いしたい。

- 実施設計で「触る展示室」のようなスペースが設けられるとの説明があり、これが実現したら画期的なものになる。「五感で楽しむ美術館」として子どもにも人気が出ると思う。
- 展示室が広いので、鑑賞中に途中で休憩できる椅子などを置いてほしい。
- 人混みや広い空間が苦手な人に狭い部屋での鑑賞ができないか。
- 床置き展示ケースを車いす利用者がのぞき込むのは難しい。立ち上げから半面をガラスにすると作品が見やすい。
- 障がい者が職員として働けるように、事務室もバリアフリーに配慮してほしい。

### 【運営関連】

- 6月23日に「文化芸術基本法」が施行された。第2条の基本理念に、年齢や障がいの有無、経済的な状況や居住地域にかかわらず等しく文化芸術を鑑賞し、これに参加し、創造することができるような環境整備が図られなければならないとある。今後、館長を中心に信濃美術館でも取り組んでほしい。
- 障がい者がスタッフとして働ける美術館になるとより身近になってよい。
- 美術館の運営に障がい者も参加できないか。障がい者が参加して鑑賞プログラムをつくることで、健常者も鑑賞プログラムから学ぶことができる。障がいのある方が喫茶の手伝いや館内の清掃をすることを含めて、障がい者と一緒に美術館をつくっていく立場になれるとよい。
- 設備の技術は日進月歩。あまり設備に頼り過ぎずに、学芸員と障がい者が一緒になって人的なサービスの中で工夫していくことのほうがより人間的である。
- 精神障がい者やひきこもりが長い人は外見では分らない。外見では分らない人への対応に言葉はあまりいらぬ。そつとそばに寄り添ってもらえるだけでよい。
- 障がいと言っても様々であり個別に違うが、障がいのある人が気軽に鑑賞できるサポート体制を考えてほしい。例えば、視覚障がいのある人が絵画鑑賞できるようなガイドができるサポート。これには専門的な養成研修を受けたボランティアの確保が必要であるが、そのこと自体に大きな意味がある。以前、視覚障がい者の方と「美術館に行こうツアー」を企画したが、絵を前にしてガイドする人と目が見えない人の間に豊かなやり取りがあった。これも新しい文化だと思う。

- 限られたマニアックな人ではなく、もっとごく普通に暮らしている人たちが「表現をする」ということと、「生まれた作品に触れることで豊かさを味わう（鑑賞する）」こととの両輪があっこそ、豊かな芸術文化が生まれていく。
- 触れる美術品の試みは大変ありがたい。2階の一部エリアに限定せずに、コレクション展示室にも設置してほしい。
- 「六甲山の上美術館さわるみゅーじあむ」で歌川広重の浮世絵を鑑賞した。これまでは立体コピーのようなものを触って作品の説明を受けることが多かったが、この美術館では富士山で1ページ、波で1ページ、雲で1ページというように絵を分割して示し、全部組み合わせることで作品になる説明をしていて分りやすかった。今後の美術館運営の参考にしてほしい。
- 新美術館は対話と案内をキーワードとしている。視覚障がい者にとっては、キャプションを音声化する、事前に点字の説明文を用意することの他に、絵画の前で対話型鑑賞をすることが非常に重要。これは学校現場でも見直されてきている。加えて案内は、やはりプロの説明とあまり知識のない人の説明では全く絵画の理解が異なる。
- 障がい者の美術鑑賞は、触れる美術品だけではない。鑑賞の仕方には目、耳、手によるものがあるが、特に目の見えない方の美術鑑賞で注目されているのがソーシャルビュー、絵を語る鑑賞である。目の見える人が目で見て感想を述べ、目の見えない人はそれを聞いて絵を咀嚼して、みんなで議論すると健常者が見えなかったところが見えてくる。それが作者の真意ではないかということで注目されている。
- 視覚障がい者が美術を鑑賞する際、説明者の力の入れ方や息づかいによって聴いている方は鑑賞に近い思いをする。そのような説明者が得られない場合は、ボランティアとペアを組めるようなイベントを含めて考えてほしい。
- 信濃美術館で触れる美術品をたくさん揃えろとは言わないが、他館でも触れる美術に取り組んでいるところがあるので、年に1、2回、それらを集めて障がい者の美術展と合わせて展示するなど取り組んではどうか。まずは関心を高めていくことが大事である。
- 障がい者の鑑賞日を設けてほしい。車いすの人が立っている人が邪魔にならずに鑑賞できてよい。
- 例えば、盲学校と組んで視覚障がい者の絵画鑑賞の日を設けるなど、運用しながら取り入れていって、よりよい美術館にしてほしい。

- 特別支援学校などが団体に鑑賞する際に、人気のある展覧会の場合、一般の方も大勢いて、車いすの人たちが介助者も含めてぶつかったりするので非常にづらい。鑑賞動線を考えてもらうとありがたい。
- 展示室内に補助犬の同伴を認めてもらえると障がい者が一人で鑑賞できてよい。
- 大人の目の高さから鑑賞する考え方だと車いすの人だけではなく、子どもも置いてけぼりになってしまうので考慮してほしい。
- 障がいのある人の表現した作品展示を企画に入れてほしい。単純にアールブリュット、アウトサイダーアート、障がい者アートという言葉で括ることに違和感がある。むしろこの言葉を使いながらもその議論をしていくことにこそ意味がある。とりわけ現代アートは「アートとは何か」を様々な形で提言しているし、障がいのある人のアートの世界がその議論の先にある。大事なものは、議論していくことであり、問題提起していく美術館であってほしい。いつかは括りがなくなり、ボーダレスになっていくことが望ましい。
- アールブリュット、アウトサイダーアート、エイブルアートの話が出た。それがよいのか、悪いのかを含めて言いづらい立場にあるが、展示会のバリエーションでそれが解消できないか。一昨年、アーツ前橋で「表現の森」という企画展をしていて、一般的な美術館で展示するには未完成なものを並べているが、プロセスを感じてもらうことで鑑賞者に訴える企画をしていた。企画展自体のバリエーションで開かれた美術館をアピールできないか。
- 県内には障がい者アートに関わるスタッフがたくさんいる。そういう人たちと連携しながら、障がい者アートが上手く回っていくような役割を信濃美術館に担ってほしい。
- ザワメキアート展出品者の個々の物語を映像化やバリアフリー絵本など別の作品にする活動をしている。信濃美術館でザワメキアート展の作品を常設展示してほしい。
- 今後、学芸員には様々な力が求められるが、専門的になり過ぎて、普通の人々が鑑賞したり、表現したりすることから遠くなってしまふ懸念がある。美術の専門性は大事だが、それを分りやすくすることが大事な専門性だと思う。
- 作品を展示する、たくさんの方が鑑賞する文化を創っていくためには、ごく普通に暮らしている人が、いかにアートにアクセスしていかれるか。そして、日常生活の中で気軽に楽しく表現することへのアプローチが必要である。美術館では、出前講座などでいろいろなところでアートワークの機会を作っていく構想だと聞くが、それは学芸員だけの仕事ではない。県内にはアートワークショップがで

きる人がたくさんいるので、そういう人材を活用していくことが大事である。美術館にはそのネットワークの拠点になってほしい。

(以上)